

二神島の葬墓制

佐野 賢治



写真1 二神島の街並み

2009年に始まる本共同研究の民俗方面の調査・研究では、網野善彦を中心に行われた本浦の西島にある代々二神島の領主であった二神本家の墓石群の考古学的発掘調査（その報告は、田代郁夫・若松美智子『二神家墓地中間報告』1986、田代郁夫・河野真知郎「愛媛県二神島・二神家墓地の調査報告」第59回常民文化研究会 1998・3・27など）を受け、葬墓制に関わる聞き取り、墓石調査に力点を置くことにした。

二神島の墓地を訪れると“イエ”と呼ばれる墓上施設がまず目につく。少し見聞きしただけでもかつてはこのようなイエを土葬上に設け、13回忌ぐらいになると改葬したという。また、島内では山から転げ落ちてきた五輪塔の一部を屋敷神として祀ったり、石垣に埋め込んだりしている。城ノ後墓地ジョウノシロの墓碑からは家名の多いことがうかがえ、両墓制的な性格を持つか否か、中世墓から近世、近現代への墓制の連続性と非連続性、集落の形成と

家意識の在り方などの課題が想定される。そのためには、民俗伝承全般を対象とせず葬墓制に焦点をあてること、島内の墓石の悉皆調査が必要との意見が出されるなかで新たに墓石班が組織され2011年から15年にかけてその第一段階として城ノ後墓地ジョウノシロの悉皆調査が行われた。

以上の調査を踏まえ現在、『二神島 葬送と墓の民俗資料編』と題する報告書を編集集中である。この報告書では、墓資料として、共同墓地の一

写真2 城ノ後墓地 2016年12月



写真3 二神島の漁港

写真4 墓石調査 2012年9月

つ城ノ後地区の墓石、726基の悉皆調査のデータを掲載した。遺跡としての墓地、遺物としての墓石、遺文としての墓標、それぞれの性格を墓石の配置・位置、墓石の形式・法量・石材、文字資料としての戒名などを記載し、現時点での正確な基礎資料を目指した。また、葬送と墓の資料として、葬送と墓に関する聞き書きをそのままの形で記述し、島の人々の葬送や墓に対する生の声を文字化して伝える。この悉皆調査の統計や数量から客観的に何を読み取り、民俗誌の生の資料も合わせて二神島の葬送制をどのように本格的に読み解くのかは今後の研究に委ねられるが、現段階での若干の考察を付記した。なお、編集作業の工程の中で、確認が必要な点が数か所あがり、2016年12月には追加調査として二神島現地調査を行った。

いずれにせよ、渋沢敬三が強調したように、二神島の葬送と墓の民俗に焦点を当てた本調査は学界に正確な資料を提供することであり、墓石班の調査者はまさに炎天と寒風、蚊の襲来、傾斜地から滑り落ちぬ格闘も含め文字通り踏ん張った。この報告書が斯界の研究者に利・活用され、葬送制研究の新たな展開の基礎資料になればと思う次第である。